

日蓮大聖人御書全集

じやくにちぼうごしよ

寂日房御書

新版
1268
ゝ
1270

じやくにちぼうごしよ

寂日房御書

こうあん

ねん

弘安2年('79)

がつ

9月16日

にち

58歳

さい

おん

音

信

これまで御おとずれ、かたじけなく候。

そうろう

そ

じんしん

受

希

夫れ、人身をうくることはまれなるなり。すでにまれなる

じんしん

ぶつぽう

人身をうけたり。また、あいがたきは仏法、これもまたあえ

おな

ぶつぽう

なか

ほけきよう

だいもく

けつく

り。同じ仏法の中にも法華経の題目にあいたてまつる。結句、

だいもく

ぎようじや

かこじゆうまんおく

しよぶつ

題目の行者となれり。まことにまことに過去十萬億の諸仏

くよう

もの

を供養する者なり。

にちれん

にほんだいいち

ほけきよう

ぎようじや

かんじほん

日蓮は日本第一の法華経の行者なり。すでに勸持品の

にじゅうぎよう

げ

もん

にほんこく

なか

にちれんいちにん

二十行の偈の文は、日本国の中には日蓮一人よめり。

はちじゅうまんおくな

ゆた

ぼさつ

くち

の

しゅぎよう

八十万億那由他の菩薩は、口には宣べたれども修行した

ひといちにん

ふ

しぎ

にちれん

い

ふぼ

る人一人もなし。かかる不思議の日蓮をうみ出だせし父母は、

にほんこく

いっさいしゅじよう

なか

だいかほう

ひと

ふぼ

日本国の一切衆生の中には大果報の人なり。父母となり、

こ

かなら

しゅくじゅう

にちれん

ほけきよう

しやか

その子となるも、必ず宿習なり。もし日蓮が法華経・釈迦

によらい

おんつか

ふぼ

ゆえ

れい

如来の御使いならば、父母、あにその故なからんや。例せば、

みようしようごんのう

じょうとくふじん

じょうぞう

じょうげん

しやか

たほう

妙莊嚴王・淨徳夫人・淨蔵・淨眼のごとし。釈迦・多宝

にぶつ

にちれん

ふぼ

へん

たも

はちじゅうまんおく

の二仏、日蓮が父母と変じ給うか。しからずんば、八十万億

ぼさつ

う

たも

じようぎようぼさつとう

しぼさつ

の菩薩の生まれかわり給うか。また、上行菩薩等の四菩薩

なか すいじやく ふしぎ おぼ そろろう
の中の垂迹か。不思議に覚え候。

いっさい もの

な たいせつ

てんだい

一切の物にわたりて名の大切なるなり。さてこそ天台

だいし

ごじゆうげんぎ

はじ

みようげんぎ

しやく

たま

にちれん

名乗

大師、五重玄義の初めに名玄義と釈し給えり。日蓮となの

じげぶつじよう

い

もう

りこう

ること、自解仏乗とも云いつべし。かように申せば利口げ

き

どうり

指

きよう

に聞こえたれども、道理のさすところ、さもやあらん。経

い

にちがつ

こうみよう

よ

もろもろ

ゆみよう

のぞ

に云わく「日月の光明の、能く諸の幽冥を除くがごとく、

ひと

せけん

ぎよう

よ

しゅじよう

やみ

めつ

もん

この人は世間に行じて、能く衆生の闇を滅す」と。この文

こころ

あん

たま

しにんぎようせけん

ひと

せけん

の心よくよく案じさせ給え。「斯人行世間（この人は世間

ぎよう

いつ

もんじ

じようぎようぼさつ

まっぼう

はじ

に行じて）の五つの文字は、上行菩薩、末法の始めの

ごひやくねん しゆつげん

なんみようほうれんげきよう

ごじ

こうみよう

差

五百年に出現して、南無妙法蓮華經の五字の光明をさし

出

むみよう

ぼんのう

やみ

照

いだして、無明・煩惱の闇をてらすべしということなり。

にちれん

じようぎようぼさつ

おんつか

にほんこく

いつさいしゆじよう

日蓮はこの上行菩薩の御使いとして、日本国の一切衆生

ほけきよう

受

持

すす

やま

に法華經をうけたもてと勧めしはこれなり。この山にして

怠

そうろう

いま

きようもん

つぎしも

と

い

もおこたらず候なり。今の經文の次下に説いて云わく

わがめつど

のち

まさ

きよう

じゆじ

「我滅度して後において、応にこの經を受持すべし。この

ひと ぶつどう

けつじよう

うたが

うんぬん

人は仏道において、決定して疑いあることなけん」云々。

もの

でしだんな

ひとびと

しゆくえん

おも

かかる者の弟子檀那とならん人々は、宿縁ふかしと思つ

にちれん

おな

ほけきよう

ひろ

ほけきよう

ぎようじや

て、日蓮と同じく法華經を弘むべきなり。法華經の行者と

いわれぬること、はや不祥なり、まぬかれがたき身なり。彼か

樊 噲

張 良

將 門

純 友

のはんかい・ちようりよう・まさかど・すみともといわれ

もの

な 惜

ゆえ

恥

おも

ゆえ

おく

たる者は、名をおしむ故に、はじを思う故に、ついに臆し

おな

恥

こんじよう

物

たることはなし。同じはじなれども、今生のはじはものの

数

ごしよう

たいせつ

ごくそつ

奪

衣

婆

かずならず、ただ後生のはじこそ大切なれ。獄卒・だつえば・

けんねおう

さんずのかわ

端

衣

装

剥

とき

おぼ

懸衣翁が三途河のはたにていしようをはがん時を思しめし

ほけきよう

どうじよう

たも

ほけきよう

ごしよう

恥

て、法華経の道場へまいり給うべし。法華経は後生のはじを

隠

ころも

きよう

い

はだか

もの

ころも

え

かくす衣なり。経に云わく「裸なる者の衣を得たるがご

うんぬん

ごほんぞん

めいど

衣

装

とし」云々。この御本尊こそ冥途のいしようなれ。よくよ

く信じ給うべし。おとこのはだえをかくさざる女あるべし

しん

たも

男

肌

隠

め

や。子のさむさをあわれまざるおやあるべしや。釈迦仏・

こ

寒

哀

親

しゃかぶつ

ほけきよう

妻

親

そうろう

法華経は、めとおやとのごとくましまし候ぞ。

にちれん

たも

こんじよう

はじ

隠

たも

ひと

日蓮をたすけ給うこと、今生の恥をかくし給う人なり。

ごしよう

にちれん

おんみ

恥

もう

きのう ひと

後生はまた、日蓮、御身のはじをかくし申すべし。昨日は人

うえ

きよう

わ

み

うえ

はな咲

果

嫁

の上、今日は我が身の上なり。花さけばこのみなり、よめの

姑

そうろう

しんじん

怠

しゅうとめになること候ぞ。信心おこたらずして、

なんみようほうれんげきよう

とな

たも

たびたび

おんおとづれ

もう

南無妙法蓮華経と唱え給うべし。度々の御音信、申しつく

そうろう

じやくにちぼう

たま

しがたく候ぞ。このこと、寂日房くわしくかたり給え。

くがつじゅうろくにち
九月十六日

にちれん
日蓮

かおう
花押